

# 帰命と願生

——『本願の仏地』を読んで——

寺川俊昭

一

曾我量深先生に、『本願の仏地』という題の著作がある。小論の「帰命と願生」という題は、この『本願の仏地』の中の主題の名に依るものである。この『本願の仏地』は、昭和二年に広島市の法正寺において行われた、

三日間にわたる講話の記録であるが、その内容はいわゆる信願交際論、即ち信と願との関わりを論ぜられたものである。ところがこの主題を、曾我先生は「宗教的信が内に展開する願の世界」という極めてユニークな視点に立って追求せられ、われわれの一心帰命の信心は、その内面に一つの願、即ち願生浄土の願いを展開するのであり、その願生浄土の願が信を包んで歩いて行くところに本願成就の具体的な相があることを極めて大胆に論考

しておられるのである。

曾我先生が亡くなられて、今日ではや六カ月近く経つのであるが、私共は先生から大きな学恩を受けておる身であり、その深い恩徳を憶いつつ、この『本願の仏地』を読んで、改めてそこから先生に聞くことができたところを、しばらく申し述べてみたい。

最初に私事を申して大変恐縮であるが、私がこの本を始めて読んだのは、昭和二十七年秋、一人の友人に勧められてであった。当時私は真宗の教えの何であるかについて、ほとんど何等の知見ももっていなかった身であるが、この『本願の仏地』を読んだ時、非常に深い感銘を覚えたことであった。その感銘を敢えていうてみれば始めて曾我量深先生の思想乃至は信仰に触れることができたという感動、というよりもむしろ、より正確には、

浄土真宗とはこのような世界であるのかという一種の驚きの中に、何か一つ眼が開かれたという強烈にして鮮明な経験であった。そのような感銘を得たという点で、いわば私における浄土真宗との出会いの端緒を開いてくれた本であり、その意味でこの曾我先生の『本願の仏地』は、私にとって恐らく生涯忘れることのできない本なのである。

その時、私が強い感銘を受けたのは、次の言葉であった。「吾々は信仰によって救いを求め、浄土を求めている

が、吾々が救いを求め、浄土を求めて得られる様に思っているその世界が、即ち方便化土であります。兎に角、吾々が求むれども得られない、けれども吾々が常に求めている所の世界が、即ち方便化土であります。しかし、求めずして得る所の世界が、即ち眞実報土であると思います。求めて得られない所の浄土よりも、殆んど比較にならぬ程清浄なる世界を、求めずして得る。求めずして而も既に得たり、こういふ世界が眞実報土である。求むれども得ず、それが即ち方便化土である。」(『曾我量深選集』第五卷・二九五―六頁)

このように、方便化土と眞実報土の決判について、先生

の独自の御領解を述べられている文章であった。

われわれは既に仏教的伝統の中に生きている。従って、われわれがたまたま人生の諸問題に触発されて、そこに一つの宗教的な要求を起す時、いい換えれば、自分がこの世を生きる一個の人間として、自己の生の究極的な意味を問おうとする時、われわれは既に仏教的な伝統の中にいるのであるから、必ずやそこにおいて自分の宗教的要求の満たされる場所として、いわゆる仏を求め浄土を求めずにはいられないこととなるのである。けれども、このようにして如来を求め、浄土を求めて行く努力は、それが如何に真面目なものであっても、実際の問題としては、求めても求めても、遂に何ものも得られないという失望、あるいは又、曾我先生の言をかりるならば、如何に熱烈に祈り求めても、そこに求められている如来は遂に何の力にもならない、という痛みに行き着く外はないのである。その辺りにいわゆる求道の苦しみがあるのであろう。

一体何故にこのような事態が起こるのか。思うにそれは、求められている如来が、実は自己の主観的要求の無意識的な投影に外ならないからではなからうか。求められている如来が、実は衆生を救うものだという期待をも

っているその自己の期待の影として、立てられているに外ならないからであろう。このような、求道心が直接に求め且つ祈っている如来・浄土が、『本願の仏地』において、「化仏・化土」として鋭く指摘されているのである。

この化仏・化土を簡んで曾我先生は、真実報土あるいは真実の如来を、

「求めて得られない所の浄土よりも、殆んど比較にならない程清浄なる世界を、求めずして得る。求めずして而も既に得たり、こういう世界が真実報土である。」と表白しておられるのであるが、これは実に確な表白であるといわなければならない。ところで、この「求めずして得る」とか、「求めざれども既に得たり」とは、「一体何を表わす言葉であろうか。それは即ち、真に生ける如来は境遇において見出されるという指摘に外ならない。真実にわれわれが自己の生の究極の意味を見出して満足することのできる世界、真実に私を救う如来は、人間の意志的努力によって獲得されるものではなくて、実は出会いにおいて、却ってその意志的努力を破るような形で見出され、獲得されるような真理である。このように曾我先生は語ろうとしておられたに違いない。

救いを期待しつつ如来を求めるような心を、むしろ一つの分別として破り、その分別を超えてはからずも真に生きる如来は私に開かれて来る。それが境遇であり、曾我先生のいわゆる「求めずして得る」とか、「求めざれども既に得たり」という言葉で語られている事実であるが、このように化仏・化土を簡んで、真仏・真土を開いて来る境遇を衆生に成就する一道こそ、外ならぬ親鸞聖人のいわゆる聞思道であった。

親鸞聖人が真実教と仰いだ『大無量寿経』そのものは言葉尽くして聞思を勧めていることは、その教としての眼目でみる願成就の文をみても明瞭であるが、更に流通分の経言は嚴肅に、

「設ひ大火の三千大千世界に充滿せる有らんも、要らず当にこれを過ぎてこの経法を聞き、歓喜信樂し、受持誦誦して、説の如く修行すべし。」

と勧めている。これを承けて親鸞聖人は、

「たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり」

と和讃し、この『大無量寿経』の経言に応えてよく知ら

れている通り、

「誠なる哉や、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞  
思して遅慮すること莫れ。」

と、懇切に聞思道に立つことを勧めているのである。聞  
思道のみが、衆生に真に生ける如来との値遇を与えてく  
れる事実があるからこそ外ならない。

## 二一

「聞思して遅慮すること莫れ」というが、勿論これは  
力を尽くして教法を聞けということである。しかし教法  
というものは、教えを受ける機を離れてはないのである  
から、教法といっても教義もしくは教理といった固定し  
たものではなく、人間の求道心即ち宗教的要求が、その  
直感において世間語と簡んで求め、見出し、聞いて行く  
真実の言葉の意味する。宗教的要求はやはり「言葉」に  
よって満たされるのであろうが、しかし宗教的要求は決  
して世間語——われわれの周辺に満ち満ちている——を  
聞こうとするのではない。その世間語を簡んで、真実に  
自己を自覚ましめるような言葉を聞こうとする。こうい  
う要求が、宗教的要求の端的な、そして素朴な形であろ  
うかと思う。

この聞思について清沢満之先生は

「四方八面より思索観想し、澄心練心の工夫をなす。」  
と語る。自分の魂に響く言葉の意味を、あらゆる面から  
尋ね求めて、そこに澄心練心の工夫をなす。もし清沢先  
生の言葉で更にいえば、いわゆる自力を尽くすような努  
力を、聞思は本来求めるのである。このような聞法は、  
また曾我先生の『本願の仏地』の言葉によれば、われら  
の教主の発遣の声を聞こうとする努力であると語られて  
いる。ところが曾我先生は更に一步その領解を進めて、  
発遣の声は方便化土を莊嚴するのであるが、方便化土と  
はまさに捨てられるべき世界であるといひ切られてある。  
この曾我先生の見解は、正確に了解することはまことに  
困難であるが、しかし本当に鋭い指摘として教えられ  
るべき言葉ではなからうか。先生は続いて次のように語  
られる。

「自分の安心の据り場所が、方便化土にあることを自  
覚することは、やがて方便化土を離れて、真実報土に  
得生した人である。自分は方便化土にあるものと知ら  
しめて貰った人が、同時に方便化土を超えて、真実報  
土に自分の心を安置する。」(三〇一頁)

この言葉は、やはり教法即ち発遣の声との値遇を語った

ものであるが、ここで先生が指摘されているように、聞法の努力が衆生にいわゆる教えとの値遇という事実を成熟せしめて来るのであるが、その教法との値遇とは、真実の言葉を媒介とした、一つの大きな翻りというべきであらうか。先の曾我先生の言葉によれば、真剣に真実を求めていると思っていた自分が、実は方便化土にいた、ということを担当に知らせて頂く。この自覚が転機となつて、始めてかつてこれまで自分が知ったことのない世界、求めていたつもりで実は知らず求めたことのない世界、即ちわれわれの分別を超えた大きな世界に眼を開き自己を見出すのである。

とすれば、われわれのいわゆる聞法求道というものは如来を求める努力であるけれども、決して無媒介に直ちに如来に到りつくものではないのであらう。むしろ真に教法に値遇し、発遣の声を聞いたということは、自分の聞法の行業が、実はそのまま化仏・化土を莊嚴する行業であつたということを、本當に知らせて頂くということではなからうか。そしてその深い痛みを媒介として、われわれは始めて真仏・真土の発見に到るのである。その意味で教えとの値遇は、このような「廻入」というべき即ち廻心において始めて真実の如来を発見し、真実の淨

土を見出すと共に、同時にそこにはその真仏・真土を知らず、これに背き続けてあつた自己が挙体的な懺悔の中に、明々白々に知られてある、というような構造を本来もっているというべきであらう。

このようにして成立する教えとの値遇というものを、われわれの具体的な経験として語るならば、これまで自分が流転の境界の中で未だかつて経験したことのない、全く新しい経験が、自分の分別を破つてはからずも自分に開かれた、このようにいうてよいであらう。それは聞法がかち取つた一つの大きな目覚めであるが、経験に即して語れば、内から自己を開いて、深々と「そうであつたか」とうなづかせるような、そのような挙体的なうなづきということができようか。

ところでこの目覚めに対して、金子大栄先生は「所照の自覚」という定義を与えておられる。即ち、真に発遣の教えに値遇したということは、直ちに大きな翻りと共に、内に所照の自覚が開かれたというに外ならない。その自覚内容は、金子先生に従えば、無限の光が自分の煩惱の闇を破つて、明々白々に自分を照らしている、この事実への目覚めである。あるいは、自分が煩惱の身として、無限の光の中に明々白々に照らし出されている、こ

のような深い目覚めということの出来る経験である。この所照の自覚において見出され仰がれている無限の光こそ、実に阿弥陀に外ならない。従ってわれわれはこの所照の自覚において、始めて阿弥陀を発見することができるのである。即ち如来の発見とは、実は教法との値遇が自己の内面に開いて来るところの、全く新しい光景の意味に外ならないこととなる。

### 三

このようにして獲得される所照の自覚を、かつて世親菩薩は、よく知られているように、

「世尊よ、我は一心に尽十方の無碍光如来に帰命したてまつり、安楽国に生まれんと願いたてまつる。」

と表白した。この「世尊よ、我は一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」というのは、取りも直さず阿弥陀を見出した心に外ならないのであるが、世親菩薩のこの表白こそ、浄土教における信仰告白の白眉として、永遠に歴史的意味をもつものといふべきであろう。ところで、この「帰命尽十方無碍光如来」とは、どういうことであろうか。

『本願の仏地』に依ると、簡単にいえば帰命尽十方無

碍光如来とは、阿弥陀仏を見出し、そして純潔に阿弥陀仏を拜んでいる、こういうことであると語っておられる。ただこの帰命尽十方無碍光如来、いい換えれば南無阿弥陀仏であるが、これを殊に一心帰命といった時、しばしば何か絶対者としての阿弥陀仏を立てて、その阿弥陀仏を一心に拜み、あるいは一心に頼み、すがっている、このように了解されることが多いのであるが、果してそうであろうか。『本願の仏地』に更に聞くならば、

「自分の信の根源といふものを、内に求めて行くのが正しい信仰というものであります。自己の主観の中に仏を求めて行く信仰が正信であって、自己以外、自己の外に仏を求めて行く求め方を、自己の迷信というのであります。……信仰経験そのものが純粹であるといふことは、信仰それ自体の外、何物もない……。」(二三頁)

と、極めて厳密に述べられてある。この言葉に依って考えてみるに、帰命尽十方無碍光如来とは、決して信仰の外に超越者としての如来を見出し、それに帰命する、というのではない。むしろまさしく金子先生のおっしゃる所照の自覚、即ち尽十方無碍光なる世界に自己が見出されてあるという、大きな感動を表わしているのに違いな

い。この尽十方無碍光なる世界、即ち久遠劫来如来に背いて自我を主張して止まぬ自己の煩惱妄念を、内から摧破する無限なる光の世界に自己が目覚めてある、という事実の根源的意味が、如来と表白されているのである。

それを世親菩薩は一心帰命と表白したのであるが、その一心とは、「二心なく」の意であり、乃至疑蓋無雜の一心であるから、如来なる根源的事実、即ち尽十方無碍光なる世界に自己が見出されてあるという事実に対して、一点の疑いもなくはっきりと目覚め、深々とうなづいている、このような純粹な自覚、いわゆる純潔な信心が表わされているに外ならないのである。

帰命尽十方無碍光如来ということ、私はこのように領解する。それは今まで述べて来たような意味での、聞法がかち取った心であるところの、内なる純潔な信仰的自覚の表明であるが、この帰命の心は端的には、始めて如来を見出した心、乃至は如来においてある我の発見と了解してよいであろう。ところが周知のように曇鸞大師は、世親菩薩のこの「世尊我一心 帰命尽十方無碍光如来 願生安樂国」を、「願生安樂国」までを含めて世親菩薩の帰命の表白と了解しているのである。とすれば帰命の心というものは、端的には如来を見出し帰命する心

というべきものであるが、更に浄土を願生する心にまで展開して行くような、いわばダイナミックなものを内に孕んでいるものだといわなければならぬのである。

『大無量寿経』をみると、本願成就の無量寿仏の威神光明を、十二光の名を挙げて語った後、次のような非常に感銘の深い言葉を記している。

「それ衆生ありて、この光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔軟なり、歡喜踊躍して、善心生ず。若し三塗動苦の処にありて、この光明を見れば、皆休息を得て、また苦惱なけん。寿終えての後、皆解脱を蒙る。」

この経言を、親鸞聖人は「真仏土巻」に引文していることに注意したい。帰命において見出された無碍光は、ただに衆生の煩惱を破って衆生を根底から照らし尽くすに止まらず、更にその光は衆生の苦惱を癒し、大きな休息即ち大安慰を与える。いわばその光りが苦惱の衆生の大安慰となり、帰命の心はその意味で安心という特質をもつ。そういう徳を、無碍光はもつのである。

このことは、言葉を換えていえば、無碍光乃至は無量光なる如来に、衆生が真に安んずることのできる世界である、浄土という意味を見出したことに外ならない。親鸞聖人がこの経言を「真仏土巻」に引文されたというこ

とは、この事実を語っているのであろう。ところでこの  
事實は、無量寿仏自身を成就することを誓った、いわゆる  
撰法身の願である光明無量の願・寿命無量の願が、親  
鸞聖人の領解においては、同時に無量光明土である浄土  
を成就する願でもあるという、深い意味をたたえた事実  
に基くものである。不可思議光なる如来が、光明無量の  
願、寿命無量の願の成就として、本来無量光明土とい  
う意味をもつ。親鸞聖人のこの領解は、如来及び浄土の領  
解として、決定的に重要であることに注意しなければな  
らない。

如来と浄土、それは身土一如といわれ、依正不二とい  
われている通りであるが、浄土があつてそこに如来ま  
しますと考えることもできるけれども、浄土を成就する願  
と如来自身を成就する願とが一つである限り、帰命にお  
いて見出された如来、即ち無碍光であり真に無量光であ  
る如来が、直ちに浄土という意味をもつ、このように解  
すべきであろう。むしろ、光寿二無量の徳をもつ如来が  
自己自身を以て衆生のまさに帰るべき故郷である浄土と  
なろうとする、それがつまり光寿二無量の願を、親鸞聖  
人が大悲の願と仰いだ所以であるに違いない。

このように、如来に浄土の意味あるいは浄土の徳を発

見することによって、如来を見出した心である帰命の心  
は、直ちに必ず願生の心、即ち浄土を見出し、浄土を  
願うて行く心として展開することとなるのである。この  
ことを視点を変えて考えてみると、帰命の心、即ち南無  
阿弥陀仏と表白されるあの心を離れては、われわれは真  
に願生すべき浄土をもつことはできないのである。南無  
阿弥陀仏を離れて考えられ、あるいは語られ、求められ  
ている浄土は、それこそまさしく化土といわれるべきも  
のである。何の力もない浄土である。若し南無阿弥陀仏  
に帰することができるならば、直ちにわれわれは自分の  
本當の願い、凡夫として流転の中にある自分が、その流  
転の中に長く忘れ去っていた真実の願いを今更のように  
想起する、端的にいえば、これこそ自分の生命が願いか  
つ求めていた真の願いであったのかという深い感銘を伴  
って、浄土を見出した願生の心が自己の生の根源から噴  
出するのである。このようにいってよいのであろう。

世親菩薩の表白をみても、帰命尽十方無碍光如来はや  
がて願生安楽国である。善導大師の六字釈に依つても、  
「南無というは帰命なり。またこれ発願廻向の義なり」  
と領解されている通り、聞思によって帰命の心は獲得さ  
れるのであるが、その帰命の心が直ちに願生心を展開し



て来るところに、浄土教における信仰的自覚の、鋭い特質が輝いているといわなければならない。

#### 四

一体、帰命尽十方無碍光如来とは、尽十方無碍光なる世界に自己が見出されてあるという事実への、無限に深い感動の表白であった。しかしながら、この事実は一体如何にして可能であったのか。衆生がその分別を摧破して、絶対無限の如来を見出すという驚くべきことが、一体どうして起り得たのであるか。信仰的自覚はこのように、信自身の根拠を問うことができる。その時われわれの信仰的自覚は、この信仰自体が私が目覚めたというよりも、一つの喚び覚まされた心であることを、はっきりと知っているのである。如来に目覚めたような心は、喚び覚まされた心である。二河の譬えによってみれば、外には発遣の声があり、内には招喚の声がある。内外の声によって喚び覚まされて、願生心は誕生するのである。その際、発遣の声に喚び覚まされるについては、最初に曾我先生の言葉に指南されて考察したような問題があるのであるが、ともかく、内外の発遣・招喚の声によって喚び覚まされて、帰命・願生の心である信心は現実とな

るのである。

このようにして、信心は信自身の根拠を内に問うて行く。そこに信心の根拠として本願の招喚、いわゆる本願の世界を探り当てて行くのである。親鸞聖人が、

「帰命は本願招喚の勅命なり。」

と了解されたのは、帰命の信心の深みをみごとに探り当て、表白したものととして、歴史的な意味をもった領解であるといわなければならない。

信心が自己の根拠として探り当てて来た本願招喚の勅命とは、欲生我國の叫びである。欲生我國を感得し、それに応えているのは、願生彼国の感動である。それは、始めて真に帰るべく、生まれるべき世界として浄土を見出した心であるが、真に願生さるべき浄土とは、最初に考察したように、われわれが求めて見出した世界ではない。却って帰命において、向うから開けて来るような世界であり、曾我先生のいわゆる、「求めずして、しかも得たり。」「求めた以上の清浄なる世界を、求めずして既に得たり。」そのようなあり方で開かれて来る世界である。そのような浄土であるからこそ、われわれはそこにおいて始めて、自分の生の究極的意味を満足するのであり、又、真に願生することができるのである。それ故に

願生の心は実は得生の思いと一如であるような形で、動いて行くというべきであろうか。『本願の仏地』に更に聞こう。

「浄土というものは何であろうか。かう申しますと、浄土というのは、つまり本願の内容である。本願の純正内容が浄土である。或は真の信仰というものの純正内容が浄土である。或は信というものが、内に自分を展開して来る。内に展開して来ることによって、直接に感ずる所の感激といえますか、直接に感ずる所の感激或いは報恩の喜び、満足、それが即ち浄土であります。」(二七二頁)

ひそかに思うに、帰命尽十方無碍光如来と表白される帰命の世界は、それ自体完全円満した、深い満足の世界であるというべきであろう。何ものも、もはや求めることとはない。求めるもの以上が、既に与えられているという、深い満足の世界をもっている訳である。しかしながらその帰命が、内に自己の根拠として本願の世界を見出すことによって、深い満足のままにしかも願生彼国と呼応し、立上がり、歩み出すのである。いわば信仰が信仰生活として、浄土を獲得した生活として展開して来るのである。それがつまり、取りも直さず願生浄土の具体相

である。その内容を『本願の仏地』に聞くならば、

「天親菩薩の『浄土論』を見ますと、一番最初に、「世尊我一心、帰命尽十方無碍光如来、願生安樂国」と書いてありまして、その願生というものによって、二十九種の莊嚴世界を体験し、最後に「普共諸衆生、往生安樂国」とあります。純粹に願生そのものの時には、自分独り願生するのであります。けれども愈々願生に即して浄土が体験せられた時には、もはや自分独り往生を願うのではない。普く諸々の衆生と共に、安樂国に往生しようと、十方衆生救済の如来の本願を聞くのであります。」(三二〇頁)

と語られてある。

自分一人、安樂国に往生せんという願いとして始まった願生の歩みが、その願生の心において真実に浄土が体験せられる時、普共諸衆生、往生安樂国として展開する。『浄土論』は更に無仏の世界への願生をすらすら語るのであるが、自我関心を一步も離れることのできない人間が、その自我関心に染汚されているあり方を翻して、自我の幸福追求を超えた普共諸衆生、往生安樂国の祈りにおいて生きる願生者に転換する。その転換の事実こそ、無上涅槃の徳をもつ浄土が、生存の根拠として獲得されてあ

るということの証しに外ならない。繰り返すようであるが、人間がその殆んど絶望的に根深い自我関心を摧破して、普く諸々の衆生と共に安楽国に願生せんという願に生きる身に翻されるといふ、この驚くべき事実が可能であるということこそ、願生心において獲得された浄土のはたらきといわなければならぬのである。この出来事を離れたならば、浄土といってもそれこそ化土に外ならぬのではあるまいか。

このようにして、願生心において見出された浄土の意味こそ、決定的に重要である。私は、願生心に支えられた生活とは、浄土を見出した心にはからずも一つの願が与えられて、その願に立つて穢土に堪えて行くことだ、

といつてよいのではないかと、ひそかに考えているのであるが、問題はその願乃至は祈りに立つて穢土に堪えるというその内容、即ち、普共諸衆生、往生安楽国という願生道の内容ではあるまいか。それにどれほどの内容を自覚的に与え得るか、そのことが浄土教の現代におけるリアリティを決定するのではないであろうか。そしてそのことが、「本願の仏地」即ち本願莊嚴の浄土を、どれだけ確かに私が受け止めるのかを吟味する、決定的な試金石であるように思われないのである。

却って曾我先生の御領解を穢すようなことであつたかと怖れるのであるが、『本願の仏地』を読んで、改めて先生に聞き得たところを申し述べたことである。